
りーんーごー

やー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りーんーごー

【Nコード】

N86010

【作者名】

やー

【あらすじ】

好きにしる（仮）シリーズ短編第二弾。

魔法学院。それは魔法学校の中でも異端な思考、学力を持つエリートが集められる学生専用の研究施設である。

これは、魔法学院の生徒の一人、森林林檎の一日を綴った物である。

(前書き)

森林林檎。読みは、もりばやし、りんご。

魔法学院に通う2年生。14歳である。

髪の毛はむ緑でショートにカチューシャを付けている。

瞳の色は黒に近い深緑。もう黒でよくね？ と言つ意見もある。

雨音がやけに五月蠅い。

私　森林林檎は、この水が打つ音が非常に苦手だ。

本来ならこの魔法学院の講義にも出たくは無いが、今日に限ってはパスする訳にも行かなかった。

何せ私が一週間前に依頼した講義だ。放棄する訳には行かない。部屋に引き籠りたくなる衝動を抑え、私は何とか真面目に講義を聞いているように取り繕う。

風の魔法で水の音を消したいが、生憎と私の風属性魔法の腕はそこまで高くは無い。そんな真似をすれば肝心の講義まで聞こえなくなってしまう。

私は4つの属性の魔法が扱える四色魔法使のだが、その中で一番得意なのは炎だ。次に電気、そして風、最後に氷。

背中の毛が弥立つ様な、体中が鳥肌になるようなざわざわ感が、私を此処から出て行けと催促する。

それを必死に理性が押さえつけ、何とか講義に集中する。

「さて森林さん、今日の講義は以上ですが如何でしょうか？」

最悪です。後日もう一度お願いします。

「はい。今日はお忙しいところを本当に有難うございます。とても参考になる講義でした」

乗りか何かで貼り付けたような、機械的な笑顔で返事をする。

自分でも呆れ返る。何故に人間とはこうも都合の良い事ばかり口に出るんだろう。

取りあえず、聞いた講義と黒板の内容をノートに書き写した。―
先ず、之を資料として後で纏めよう。

今は一刻も早く此処から離れよう。これ以上雨音を聞いていては気が狂いそうだ。

「げ」

私は講義が終了した後、ふと買い足す物があったのを思い出した。今、自分が凄く苦い顔をしているのが分かる。正直明日 いや晴れた日に変えたが、買わなきゃいけない物が混ざっている以上は買わなければいけない。

「……………」

憂鬱な気持ちになりながらも我慢して玄関まで歩き、手続きを取り、ついでに玄関口においてある鍵付きの傘立てに向かい、ロックを外す。

自由になった自分の傘を持って街に買出しに向かった。

夜。私は自室へと帰り、部屋の電気を付ける。右手には雨で濡れたビニール袋がある。

室内の様子を見渡すが、誰も居ない。同室者は帰って無い様だった。

足元に上着の端等、雨に濡れて気持ちが悪い。

早く着替えたいが、まずはする事がある。そもそもその為の買い物だ。

私は勉強机の半分は埋めるほど大きな籠の前に立つ。籠の中央に付いている扉を上へ上げ、手の平を差し出した。

するとその籠の主であり、私の相棒が手の平に渡った。

「ただいま、りんくん。一人で寂しかったでしょう？」

リスだ。うん、リス。小さなリス。名前はりんくん。呼び捨て推奨。つーか君付けするな。

りんくんを手に乗せて、机の上へと導く。

袋に手を突っ込み、取ってきたりんくん用のご飯を 店で購入した静凜産の林檎を手に取り、風の魔法で浮かし、風で切り分ける。それをりんくんに一切れ渡し、他の物は取り出した皿の上に乗せ、

一切れ手元に移す。

「美味しい？ りんくん」

りんくんはカリカリと林檎を齧る。

私も林檎を頬張る。林檎特有の酸味と甘味、そして林檎の持つ果汁が口いっぱい広がる。

いや、別に私林檎好きじゃないけど。何か、自分食べてる様な気がするし、そもそもこれはりんくんのご飯の余りだし、でもりんくん一匹で食べられる量でもないし、私が食べるしかないし別に林檎なんて、好きじゃないんだからね！

「ただいまーあー、林檎帰ってんだー」

間の伸びた暢気な声が部屋に響く。入り口に視線を向ければ金髪のショートカットに眼鏡をかけた少女。名は

「おかえり、リル」

「あ、りんくんだー。お食事中？」

「そうよ。で、あんたは今まで何やってたの？」

リルは隣の勉強机　まあ、自分の机に座り手に持っていた鞆を机に置いた。

「うんー実はねー今日雨でしょー？　ちょっと植物のけんきゅー」
「そ」

こいつの分野は自然属性だったな。なるほど、雨と植物の関連性か。

「でもー、林檎はー何でりんくんにー餌を上げるときはーいつも籠から出すのー？」

「籠の中で食事をさせるなんて、可哀想でしょ？」

「へー林檎って優しいねー」

「……そ？」

「うんー優しいよー」

「私は自分が優しい人種だと思ったことは無いけど」

「えーそー？　林檎は優しいよー」

「優しい、ねえ。私は、自分を優しいと思うような偽善者じゃない

わ

「んー偽善者ー？」

「そう」

「でもでもー、優しい人ってー皆が皆偽善じゃないとー、思うよ？」

「そ。気楽なものね」

「んー、んー、林檎はー、どうしてー、そんな風に考えるのー？」

「何が？」

「優しい人はー偽善者だなんてー」

「そうね、或いは単に自己犠牲心溢れる人かもね」

「んーんー、林檎はーひねくれ過ぎだよー」

「あんたは気楽過ぎね」

「えへへー」

「褒めてない」

こいつ、こんな風に間の伸びた喋り方をしているが……実は魔法に関してはある意味恐ろしい素質を持っているんだよな……まあ、魔法学院マジックに居る以上は普通の感性を持った魔法使いなんて居ないけど。

「でもでもー優しいって、自己犠牲かー自己満足かもだけどー。それが皆にー喜んで貰えるようなー自己犠牲やー自己満足ならー良いよねー？」

「ええ、でもそれが常に誰かにとって嬉しいものではないわ」

「んーんーそうかもーだけどー」

私は耳に意識を傾けつつ、りんくんと一緒に林檎を頬張る。ん、美味い。

「でもでもーそんな顔が出来る人はー、やっぱりー優しい人だよー」

「……は？」

つい、素っ頓狂な声を出してしまう。いや、不意を突かれた。

あ、ま、まあ、時折こいつは行き成りとなんでもない事を言い出すから。本当、油断できない。

「はー。じゃなくてー、林檎がーりんくんを見るとときーすっごく穏

やかな顔してるんだよー」

「……はえ？」

指を人の顔に向けて挿すこいつに指導するよりも前に、更なる不意を突かれた。

か、顔？ 私が？ りんくんを見る時？ つい、口元に手を運び、突いてみる。いや、それで表情が分かれれば苦労はしないけど。

「それでねー、そんな林檎をねー、見てるのがあたしのねー、密かな楽しみ何だよー！」

「……つまり、人の顔を見てニヤニヤしてたって言う事？」

「ふ、ふぬえっ！？」

今度はリルが不意を突かれた様に反応した。ついでに顔も赤く染める。

「ちち、ちがうんだよそのー林檎、何時も捻くれてるからーじゃなくってーえーとねーそのねーそのーそのー……ご免ね？」

最終的に行き着いた結論がそれかこいつ。

「……別に良いけどね」

「……怒って……るー？」

「いや、今度からあなたのいない所でりんくんの世話をするだけよ」

「ふぬええっ！？ ご、ご免ねー！？」

「ふん、愚者が」

私は、一先ず林檎を口にする。ん、甘い。

(後書き)

林檎にツンデレ、人間には冷淡に対応する天才魔法使い森林林檎さんでござい。

林檎やリスへのデレ成分を少しは人間にも流すと人気出ると思っけど正直人間への心の壁は高い。不思議。

魔法学院と言うのは寮制の学校。学校と言うより研究機関。

卒業方法は学校で論文発表会で論文を発表し、卒業認定を貰うだけ。

ほら、簡単でしょ？ 難しいけど。

んじゃ、まったねー！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8601o/>

りーんーごー

2011年8月27日03時37分発行